令和五年度入学試験問題　国　語（五十分）

二月三日　実施

〔注　意〕

一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
二、問題冊子は17ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
四、問題冊子の表紙及（およ）び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督（かんとく）の先生に知らせてください。

受験番号

氏　名

東京女学館中学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権の都合上掲載できません。

著作権の都合上掲載できません。

著作権の都合上掲載できません。

著作権の都合上掲載できません。

著作権の都合上掲載できません。

（吉田篤弘『つむじ風食堂と僕』より）

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一　文中の〈　A　〉～〈　C　〉にあてはまるものとしてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A　ア　鮮やかな　　イ　しとやかな　　ウ　清らかな　　エ　粗野な

B　ア　おごそかな　　イ　軽やかな　　ウ　明朗な　　エ　鮮やかな

C　ア　しなやかな　　イ　まろやかな　　ウ　濃厚な　　エ　さわやかな

問二　文中の【　X　】・【　Y　】にあてはまる会話文をそれぞれ十字以内で、自分で考えて答えなさい。

問三　――線部①「もっと静かで地味な仕事が自分にはふさわしいと思っていました」とありますが、このように思っていた「果物屋さん」が、なぜ果物屋になったのだと考えられますか。その説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　自分に合うものが何なのか明確に意識できたとしても、ふとしたときに人間はむしろ自分にはない性質のものに対して憧れの思いを持つことがあるから。

イ　将来の仕事を決めるときは、意識的に自分に合う仕事を選ぶよりも、無意識に魅了されてしまったものに関わる仕事に就く方が、自分に合うことが多いから。

ウ　周りの人のためになるような公共性のある仕事をすればするほど、かえって自分自身が勇気づけられ、その仕事に魅かれることがあるから。

エ　仕事には静かなものとにぎやかなものがあるが、だいたいの仕事はどちらの要素も含むなかで、自分に合う割合を持った仕事を選ぶのがよいから。

問四　――線部②「『ええと――はい』『ほらね』」とありますが、ここで「果物屋さん」は「リツ君」の状態を言い当てました。このとき「リツ君」はどういう状態でしたか。四十字以内で答えなさい。

問五　――線部③「『わかります』と僕は果物屋さんの目を見て答えた」とありますが、このときの「リツ君」の気持ちはどのようなものでしたか。もっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　果物屋さんの「比率の問題」で仕事を選ぶという考え方は、今まで考えたことのない新鮮なものであったが、事の本質を突いた魅力的な考え方であったことを実感している。

イ　おせっかいで大人げない豆腐屋さんに比べて、納得しやすい合理的な考え方を持つ果物屋さんの話を聞くうちに、果物屋さんの話しか耳に入らず、豆腐屋さんを軽んじている。

ウ　果物屋さん自身が実は街の外からやってきた人で、常にさまざまなことに迷いながらも、常識にとらわれず自分の意思を貫いてきた人であることに気づき、その生き方に関心を持っている。

エ　黒と茶の混ざる果物屋さんの目はまさに、相対するものがさまざまな比率で混ざるという「比率の問題」を連想させ、果物屋さんは常に理屈っぽいことを考えている機械的な人だととらえている。

問六　――線部④「理屈抜きで、ただ、オレンジ色が好きだから果物屋になった」とありますが、「理屈抜きで」将来の仕事を選ぶというのは、果物屋さんの考えによれば、何を重視して仕事を選ぶことになりますか。自分で考えて漢字二字で答えなさい。

問七　――線部⑤「仕事なんてなんでもいいの」とありますが、この時の「マリーさん」の考えについて説明したものとしてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　どの仕事を選んでも人生にさほど影響はないが、自分はいろんな仕事に就いたことがあって、人よりも人生経験が豊富だという自負だけは持っていたいということ。

イ　いろんな仕事に就いた結果、「ものは考えよう」で、どんな仕事に就こうが生きることは楽しいと念じ続ける方が、自分に合う仕事を選ぶことよりも大切だということ。

ウ　何をもって楽しい人生とするかの基準を決めることが大切であり、それに合わせて仕事の順位付けをしていかないと人生は意味のないものになってしまうということ。

エ　人生において、何に軸（じく）を置いてどのような価値観を大切にするかを考えることが先で、仕事はその価値観を実現するための手段に過ぎないということ。

問八　〔　Ⅰ　〕・〔　Ⅱ　〕にあてはまる語句の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　Ⅰ　そんなはずはない　Ⅱ　そういうことね

イ　Ⅰ　そんなものか　Ⅱ　そうに決まっている

ウ　Ⅰ　そうだろうか　Ⅱ　それは違う

エ　Ⅰ　そっか　Ⅱ　そうだろうか

オ　Ⅰ　そうなのか　Ⅱ　そうか

問九　――線部⑥「何の仕事をすればいいのか決める」とありますが、結果的に「リツ君」はどのような職業に就くと考えられますか。本文に即して具体的な職業名を、自分で考えて答えなさい。

問十　本文中の登場人物について生徒が話し合っている。登場人物について正しいことを述べている生徒を、次の中から二人選び、A～Fの記号で答えなさい。

生徒A　「リツ君」は食堂の大人たちから仕事についてのいろんな考えを聞いているうちに、自分なりの仕事選びの基準に気づけたんじゃないかな。

生徒B　なるほどね。でも、「リツ君」は最初「果物屋さん」から本当のところは静かなものが好きだよねって指摘（してき）されていたから、あんまりみんなを楽しませるっていう感覚はないんじゃないかな。

生徒C　ただ、「果物屋さん」は「リツ君」は静かなものが絶対に好きだと言い当てたわけじゃないと思うよ。むしろ、いろんな価値観があるなかで自分にとって向いているものは何かなんてわかるわけがないんだから、周りの大人たちの意見をしっかり聞いて、それに従ってもらいたいと考えていたんじゃないかな。

生徒D　そういう考えもあるのね。一方で「果物屋さん」と張り合っていた「豆腐屋さん」の考え方も共感できたな。自分の仕事がみんなのためになっているっていう仕事の公共性みたいなところは僕も重視したいなって思えるんだよね。

生徒E　張り合うといえば、「マリーさん」は「豆腐屋さん」と「果物屋さん」に反発してたね。「マリーさん」自身は、仕事だけじゃなくて性別だって変えて自由に生きられるって考えてる人じゃん。だから、自分以外の「みんな」のために仕事をすることはいやだって思ってるはず。

生徒F　確かにそうかも。「リツ君」に生きる上で「おいしい」という感覚が一番大切だってことを、マリーさんは「リツ君」のハンバーグを食べて意識的に知らせたもんね。「おいしい」ってまずは自分が思えることが大切で、周りがどう感じるかじゃないってことだよね。

二　次の文章はルイス・キャロルが書いた『不思議の国のアリス』について述べたものです。読んで後の問いに答えなさい。

この物語には、ドードー、チェシャ猫、ニセ海亀などの変わった動物や、頭のおかしな帽子屋やトランプの女王のように変な人がたくさん出てきます。そのなかで、アリスが「不思議の国」に行くことになったそもそものきっかけを作り、物語全体を通じてちょこちょこ出てきては、アリスに追いかけられているのが「白ウサギ」です。このウサギは、やたらと焦ってバタバタ走り回っているかと思うと、自分ちの女中や召使いは偉そうに叱り飛ばすし、なぜかトランプの女王の裁判を仕切ったりもしています。

このウサギの登場シーンは印象的です。ピンク色の目をしたウサギが、退屈して草の上に座っていたアリスの横を走って行きます。

そのことそのものには、そんなにびっくりするようなことはありません。アリスもそれほどおかしなことが起こっているような気もしないで、そのウサギが「大変だ、大変だ、遅れてしまう」と独り言を言っているのを聞いていたのです（あとから、ゆっくり考えてみれば、ここでおかしいと思わなければならなかったのでしょうけど、そのときは、すごく当たり前のことのように思えたのでした）。でも、ウサギがチョッキのポケットから時計を取り出して、それを眺めて、また駆けだすのを見ると、アリスは、ぱっと立ち上がりました。だって、チョッキを着たウサギも、ウサギがチョッキから時計を取り出すのも見たことがないってことに、すぐに思い当たったからです。

最初は大したことはないように思ったけど、やっぱりおかしい、とアリスが立ち上がるのは、「ふーん、ウサギね……ウサギ……えっ、ウ、ウサギ？」というように、「二度見」をした感じでしょうか。このように、冒頭シーンで、「走るウサギ」と「そのウサギが時計を取り出すこと」を二段構えにアリスに意識させることで、ウサギと［　X　］が深く結びつけられているのが一層鮮明になります。

［a］、このウサギ、あとでアリスが見かけたときには、「扇と手袋が見つからない」とか、「公爵夫人に処刑されてしまう」とか言いながら、大慌てで走り回っています。まさに生死がかかっている、このウサギの慌てっぷりが、物語に漂う不穏な空気、ある種の息苦しさの素の一つだと言ってよいでしょう。

時計を眺めて「遅れる」と慌てているわけですから、どこかに着いていなくてはならない時間が決まっている、ということです。ウサギは「時間に縛られて」生きているということができるでしょう。

一方、アリスは、ヘンテコなお茶の会を開いているところに行き着き、そこで「頭のおかしな帽子屋」と「三月ウサギ」と「ヤマネ」に出会います。

この帽子屋の持っている時計は、一日のうちの何時、という時間は分からなくて、「今日が何日か」だけが分かる（しかもその日付も合っていませんが）ことになっています。しかも、その時計にバターを塗ったり、紅茶に浸したり、散々な扱いをしています。それでいて、帽子屋は、「時間」のことを「時間さん」とか「あの人」とか呼んで、「仲良くしておくと、好きな時間にしてくれるよ」とまで言うのです。（　中略　）

しかし、帽子屋は「時間さん」と喧嘩をしてしまった結果、好きな時間にしてもらえなくなってしまい、「いつでも六時」という状態から抜け出せなくなってしまいます。そこで、ずっとお茶会をしていることになっているのです（「お茶の時間が六時なの？」と思われるかもしれませんが、イギリスでは軽いタ食のことも「お茶」ということがあります）。このお茶会の場面では、いわば、時が止まっている、と言うことができます。

何だかよく分からないかもしれませんが、この帽子屋は「頭がおかしい」ことになっていますから、一つ一つのギャグというか、おふざけが分からなくてもあまり気にしなくて結構です。①大事なのは、この「お茶会」の場での「時間」への接しかたが、白ウサギとはまったく違っているということです。

白ウサギにとっては、「時間」は「守らなければならないもの」であり、「間に合わないと命を落とすかもしれない」ような「縛り」でしたし、チョッキのポケットに入っている時計は、厳格に時を刻んでいたに違いありません。［b］、帽子屋や三月ウサギは、「時間」を②擬人化してリスペクトしているように見せていながら、変な時計をいじくり回しています。

物語の語り手は、この物語のなかで、帽子屋のお茶会の場面を描くことで、白ウサギが時間に追われている様子を際立たせて

いるとも言えます。③この白ウサギの時間感覚は、私たちにとって馴染みがありますね。私たちは、朝起きてから夜寝るまで、時間を守りながら生きています。学校や仕事がない日でも、たとえば、いくらビデオや見逃し配信があっても、やはりお気に入りのテレビ番組の始まる時間は気になりますし、友だちとは時間を決めて待ち合わせるでしょう。

［　c　］、この「白ウサギ的」な時間感覚といったものを、私たちはどうやって身につけたのでしょうか。

ちょっと大きい話をしますが、びっくりしないでくださいね。思い切って単純化して言うと、ヨーロッパや日本などの地域の歴史に、線を一本引いて、「こっち側」と「あっち側」に分けるとしたとき、「こっち側」を表すのに「近代的」という言葉を使うことがあります。

「あれ？　現代じゃなくて？　④近代？　どう違うの？」

はい、もっともな疑問です。もちろん、私たちが生きているこの世界は「現代」ですし、「いつからを現代と呼ぶか」ということも大事な議論ではありますが、今、問題にするのは「近代」です。

ここで言っている「近代」とは、何年から何年まで、というような厳密な時代の分けかたではなく、合理主義、産業革命、民主主義などの考えかたによって特徴づけられる、時代の区切りかたです。ややこしいことに、確かに「現代」に生きている私たちは「近代」の人たちとは違う考えかたや行動様式を持ってもいるのですが、それでも、「現代」の社会は、大きく言うと、「近代」以降の時代として位置づけることができます。

ここでは、近代を特徴づけるもののなかでも、とくに「産業革命」について触れることにします。これからご説明しますように、産業革命は、人間の生活のしかたや考えかたを、後戻りできないようなやりかたで変えた大きな歴史上の出来事と言えるからです。そして、私たちが持っている時間に対する感覚も、実は、⑤産業革命によってもたらされたものなのです。（　中略　）

そもそも、「産業革命」という日本語は、いろいろと分かりにくくて、英語では、the Industrial Revolution、つまり「工業的な革命」ですから、「工業化」といったほうがおそらくイメージしやすいのではないかと思います。もっとはっきり言っちゃえば「機械化」のことです。その中核にあるのは、「人間（と動物）以外の動力源」と「機械による生産」で、さらに重要なのは、それまで人類が体験したこともないほどの規模の量と速度でモノが作り出され、かつ消費されるという、「大量生産・大量消費」が実現したことです。

この産業革命によって、人びとの労働は、「出来高中心」から「時間で計られる労働」へと変わります。産業革命以前、たとえば職人は、造り上げたもの（出来高）の質や量と納期で、その労働が評価されました。しかし、産業革命以降は、何時から何時まで働いたか、という「時間」によって人びとの労働が量られるようになりました。これは、今日でも私たちの労働に影響を与えている「時給」という考えかたの誕生を意味します。また、工場では大がかりな機械を動かすために、労働者がみんな一定の時間にその場に揃うことが重要となり、それに伴い時間の規則が導入されるようになります。そして、「時間による給料」と「時間の規則」というこの二つの要素が合わさると、時間を守ることが大切だ、という考えかたが人びとのあいだに浸透するようになってきます。

このような時間感覚は、一九世紀の半ばに完成する鉄道網によってさらに強化されます。鉄道会社は定時運転を乗客に約束しますし、それによって列車には分単位の正確さが求められるようになり、そのために、どこででも通用する「標準時」が必要となります。そのうえ、鉄道は移動時間の短縮をもたらし、距離感を縮めるところから、「時間の無駄を省く」という感覚も鉄道によって、より先鋭的に意識されるようになりました。

これらにプラスして、「労働している時間を売る」ことで多くの人びとが生活しているというところから、「時間＝カネ」、すなわち Time is money という「資本主義の精神」が人びとのあいだを貫徹するようになりました。「ビッグ・ベン」という、あのロンドンの有名な時計塔の建設が一八五六年であるところに象徴的に表れているように、キャロルの生きた一九世紀とは資本主義と鉄道網が飛躍的に発達した時期であり、それを支えるイデオロギー(注1)が「時は金なり」という時間感覚だったのです。

（　中略　）

このように考えてくると、「白ウサギの時間＝［　Y　］の時間感覚」、「帽子屋の時間＝［　Y　］以外の時間感覚」というように収まりそうですね。いつも「時間」を気にして走り続けている白ウサギにとって、⑥「時は金なり」どころか「時は命なり」みたいですし、「時間」と馴れ合ったり喧嘩したりしている帽子屋は、「生きられた時間」(注2)を過ごしているかどうかは別としても、少なくとも、ウサギとは全然違う態度のようです。

［　d　］、白ウサギが、何度も登場し、アリスに追いかけられることによって物語を進めていく力となっているのに対し、帽子屋のお茶会は、たくさんある奇妙な場面の一つにすぎず、先にも述べたように、この物語を支配しているのは「白ウサギの時

間」です。

その一方、このウサギは、とても「魅力的でない」人物（ウサギですが）として描かれています。せかせかと時間を気にしているかと思えば、女中や召使いには威張り散らすし、そのくせ、トランプの女王にはヘイコラしています。裁判所のお役人らしいので仕方ないかもしれませんが、あまり好きになれるキャラではありません。

つまり、この物語は、白ウサギの時間によって進められているにもかかわらず、その時間の経ちかたを身をもって示しているウサギをつまらなく描くことで、［　Z　］ようにも読めるわけです。

（佐藤和哉『〈読む〉という冒険』より）

※ 出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

（注1）イデオロギー……社会集団や社会的立場における行動の規範となる考え方。

（注2）「生きられた時間」……ここでは、目的もなくただ生きているというような時間を意味する。

問一　文中の［ a ］～［ d ］にあてはまる接続詞としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　しかも　　イ　一方　　ウ　それでは　　エ　たとえば　　オ　しかし

問二　文中の［ X ］にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを本文から二字で抜き出して答えなさい。

問三　――線部①「大事なのは、この『お茶会』の場での『時間』への接しかたが、白ウサギとはまったく違っているということです」とありますが、「帽子屋」と「白ウサギ」とではどのように違いますか。違いがわかるようにそれぞれの「接しかた」を十五字以内で説明しなさい。

問四　――線部②「擬人化」を使った文章としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　彼女はキリンのように長い首をしている。　　イ　弟は明日の鎌倉遠足にウキウキして眠れない。

ウ　梅雨は明けたが今日も雨がシトシト降っている。　　エ　軽井沢の森の中で小鳥が連なって歌っている。

問五　――線部③「この白ウサギの時間感覚は、私たちにとって馴染みがありますね」について次の問いに答えなさい。

（1）「白ウサギの時間感覚」を「私たち」が身につけるきかっけとなったものは何ですか。その答えとしてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　出来高中心の労働　　イ　時間で計られる労働の浸透　　ウ　鉄道会社の設立

エ　ビッグ・ベンの造設

（2）あなたは「白ウサギの時間感覚」を日常のどのような場面で感じますか。本文に書かれている例以外を自分で考えて、二十五字以内で答えなさい。

問六　――線部④「近代」の説明として、本文で述べられているものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　「近代」は私たちが生きているこの世界のことを表している言葉である。

イ　「現代」と「近代」は明確に分かれており、重なっている時期はない。

ウ　「近代」以前の時代を「現代」と言うが、似たような行動様式を持っている。

エ　「近代」を特徴づけるものの一つに、合理主義という考え方がある。

問七　――線部⑤「産業革命」の説明として、本文で述べられていないものをひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　産業革命で様々なものが機械化され、「大量生産・大量消費」が実現した。

イ　産業革命で初めて「時間を守ることは大切だ」という考えが人々に広まった。

ウ　産業革命によって作りあげられたものは質が高く、その労働が評価された。

エ　現在でも使われている「時給」という考えは、産業革命によってもたらされた。

問八　文中の［　Y　］にあてはまる言葉を本文から二字で抜き出して答えなさい。

問九　――線部⑥「『時は金なり』どころか『時は命なり』みたいですし」とありますが、「白ウサギ」にとって「時は命なり」なのはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

問十　［　Z　］にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　近代の時間感覚に異議を唱えている

イ　近代以前の時間感覚を見直している

ウ　近代における時間感覚の大切さを強調している

エ　物語を支配する時間感覚が何かを考えさせる

三　次の短文中の――線部のカタカナを、漢字に直しなさい。

1　基本にチュウジツに練習する。

2　医者のフヨウジョウ。

3　君にとってはロウホウだ。

4　コウテツ製の機械部品。

5　けんかのチュウサイをする。

6　国際条約にカメイする。

7　料理を皿にモる。

8　魚のタイグンが泳いでいた。

9　どうぞごランください。

10　教会でサンビカを聴く。

国

令和五年度入学試験　二月三日　実施

国語解答用紙

（字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。）

東京女学館中学校

一
問一　A　B　C
問二　X　Y
問三
問四
問五
問六
問七
問八
問九
問十

二
問一　a　b　c　d
問二
問三　帽子屋　白ウサギ
問四
問五　（1）　（2）
問六
問七
問八
問九
問十

三

1	5	9
		ご
2	6	10
3	7	
4	8	る

評点

国

受験番号

氏名